

こころの便り

第246号

令和2年9月

〒679-1434
兵庫県たつの市新宮町大屋六六八十二
株式会社 新宮運送グループ
代表/木南 一志
kiminami@shingu.co.jp
電話 079-61-751212



新宮運送ホームページ

シンプルにする

時間はいつも通りのはずなのですが、暦は秋を過ぎてセミから虫の季節になりました。武漢ウイルスはまだ終息の兆しを見せませんが、熱中症で亡くなる人のほうが問題のように思えてなりません。私たちのような現場の仕事は暑さとの戦いですが、机の上でできる仕事がテレワークとなって、次々にソフトウェアが新しくなっているようです。この原稿も自宅から本社のコンピュータに接続しながら作ることができるようになりました。

デジタル化という流れが加速して、白か黒かをハッキリさせていきます。有能な官僚社会が生み出した手続き主義による印鑑や文字訂正も簡単に対応できるようになります。行政のデジタル化は、これまでの書面重視の申請を否応なく変えていきます。私の若いころの申請書面は、訂正印をはじめから押して窓口で注意を受けたら、何字削除何字挿入と対応できるように準備したものでした。

シンプル化されて改善されることがたくさんあります。しかし、物事をハッキリさせるということは、車で言えばハンドルの遊びがないということになります。ハッキリすべきところとそうでないところを見極めていくのは難しいことです。それよりも大切にすべきことは、思いやりを持つということではないでしょうか。白黒はハッキリさせるが、間違っていた側を責めるだけではなく、どうフォローしていくかを考える、どのようにすれば共存できるかを探り出す、など責

任をハッキリさせたうえでなら、できることはたくさんあると思います。

これまでのアナログ社会は、責任の所在をハッキリすることなく、時間の経過とともに忘れてしまふことを期待するかのような対応がほとんどで、諸外国との交渉は、領土問題をはじめ拉致も同じでほとんど解決していません。国内においても同じことが言えます。重大事件の判決や戦時中の問題さえ解決しないまま七十五年も経ってしまいました。

今後は、終止符を打つ決断が求められていくことと思いますが、デジタル化で忘れてはならないのが「思いやり」です。これは「甘さ」ではありません。「やさしさ」でもありません。当然、学歴で得られるものでもありません。

平和な落ち着いた世の中を生み出そうとするときに必要な条件であると私は信じています。真の平和を訴えていくときに忘れてはならないことで、これがないと防衛問題は本物にはなりません。「思いやり」は、安全運転にもつながります。席を譲る、明るい挨拶を交わすなど、世の中を良くする指針となっていくのです。

そして、それを実行するのは、
紛れもない「あなた」です。
自分から変えていきましょう。

被災地にこころを寄せながら

木南 一志 拜

尋常小學校修身書 卷六 兒童用

第六課 忠孝

北條氏が滅びて、後醍醐天皇は京都におかへりになりましたが、間もなく足利尊氏が反きました。楠木正成は諸將と共に尊氏を討つて九州に追拂ひましたが、その後、尊氏が九州から大軍を引きつけて京都に攻上つて来るとの知らせがあつたので、勅を奉じて、尊氏を防ぐために兵庫に赴きました。正成はこれを最後の戦と覺悟して、途中櫻井の驛でその子正行に向ひ、「父が討死した後は、お前は父の志をついで、きつと君に忠義を盡し奉れ。それが第一の孝行である。」とねんごろに言聞かせて、河内へ返しました。この時正行は十一歳でした。正成はそれから兵庫に行つて遂に湊川で討死しました。



家へ歸つてゐた正行は、父が討死したと聞いて、悲しさの餘り、そつと一間に入つて自殺しようとした。我が子の様子に氣をつけた母は、この有様を見て走りより、正行の腕をしつかとおさへて、「父上がお前をお返しになつたのは、父上に代つて朝敵を滅し、大御心を安め奉らせる爲ではありませんか。その御遺言を母にも話して聞かせたのに、お前はもうそれを忘れましたか。そのやうなことで、どうして父上の志をついで、忠義を盡すことが出来ませんか。」と涙を流して戒めました。正行は大そう母の言葉に感じ、それから後は、父の遺言と母の教訓とを堅く守つて、一日も忠義の心を失はず、遊戯にも賊を討つまねをしてゐました。

正行は大きくなつて、後村上天皇にお仕へ申し、たびたび賊軍を破りました。そこで尊氏は正行をおそれ、大軍をつかはして正行を攻めさせました。正行は勝負を二戦で決しようと思ひ、弟正時をはじめ一族をひきつれて、吉野の皇居に赴き、天皇に拜謁して最後の御暇乞を申し上げました。天皇は正行を近く召され、親子二代の忠義をおほめになり、汝を深く頼みに思ふぞとの御言葉さへ賜はりました。正行はそれから四條畷に向ひ、僅かの兵で賊の大軍を引受けて花々しく戦ひましたが、此の日朝からのげしい戦に、味方は大方討死し、正行兄弟も矢きずを多く受けたので、とうとう兄弟さしちがへて死にました。

格言 忠臣ハ孝子ノ門ニ出ツ。